



リーダーシップ教育の詳細を紹介

自他の行動を客観的に振り返り、 目指すリーダーシップの実践につなげる

神奈川県立藤沢清流高校

神奈川県立藤沢清流高校では、2016年度から、「権限や役職によらないリーダーシップ」の理論に基づいたリーダーシップ教育に取り組んでいます。1年次に配置した学校設定科目「みんなのリーダーシップ入門」で、誰もが発揮できるリーダーシップを学び、コミュニケーション力や傾聴力などの向上を図っている様子をVIEWnext高校版8月号で紹介しました。本記事では、授業の振り返りや、育成を目指す資質・能力の評価方法などについて、詳しくお伝えします。

VIEWnext 高校版8月号「誌上で見学 学びのnext」は、[こちらをクリック](#)

本記事の コンテンツ

- 1 導入の背景と授業概要** 権限や役職によらず、目標達成に向かって誰もが発揮できるリーダーシップを育成
- 2 授業の振り返り** 授業の振り返りを共有する場を設け、多面的に自分の行動を捉える
- 3 成果と展望** 授業や学校行事が活性化。「リーダーシップ教育」という特色ある教育について、中学生への周知が課題

総括教諭・
キャリア支援
グループ

小島昭彦

こじま・あきひこ

教職歴34年。同校に赴任して11年目。外国語科（英語）。



キャリア支援
グループ

龍前唯似

りゅうまえ・ゆに

教職歴10年。同校に赴任して5年目。理科。



学校概要

◎神奈川県立大清水高校と同藤沢高校が再編統合し、大清水高校の校地に開校。キャッチフレーズは、「まじめがかっこいい」。2013～15年度、神奈川県「確かな学力向上推進重点校」（アクティブラーニングに基づく学力向上推進）、16～21年度、同「授業力向上推進重点校」に指定され、主体的・対話的で深い学びの視点での授業改善に取り組む。

設立 2010（平成22）年

形態 全日制／普通科／共学

生徒数 1学年約280人

2021年度入試合格実績（現浪計） 国公立大は、静岡大に1人が合格。私立大は、青山学院大、駒澤大、専修大、東海大、東洋大、日本大、法政大、明治大、神奈川大、関東学院大などに延べ262人が合格。

URL <https://www.pen-kanagawa.ed.jp/fujisawaseiryu-h/>

キャリア支援
グループ

内藤翔太

ないとう・しょうた

教職歴7年・同校に赴任して3年目。外国語科（英語）。



キャリア支援
グループ

佐藤健太郎

さとう・けんたろう

教職歴3年。同校に赴任して4年目。数学科。



1 導入の背景と授業概要

権限や役職によらず、 目標達成に向かって 誰もが発揮できる リーダーシップを育成

神奈川県立藤沢清流高校は、2013年度に、神奈川県「確かな学力向上推進重点校」の指定を受け、全校で「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に取り組んできた。そのさらなる推進のためにはもうひと工夫が必要だと考えていた小島昭彦先生が、2015年に開催された立教大学のカンファレンスで出会ったのが、日向野幹也教授（現：早稲田大学教授）らが提唱する「権限によらないリーダーシップ」の理論だ。同理論は、リーダーシップの最小要素を、目標共有（目標の浸透）、率先垂範（自ら行動し周囲を巻き込む）、相互支援（仲間を支える、支援を求める）とし、すべての人が身につけるべき素養としている点に特徴がある。

「権限や役職で人を引っ張るのではなく、リーダーを支えたり、改善点を提案したりすることもリーダーシップであるという考え方がとても新鮮でした。中学校時代までにリーダーを経験したことが少ない本校の生徒が、その3要素を身につければ、それぞれが集団の中で輝く存在となり、教育活動が活性化するのではないかと考えました」（小島先生）

同校のリーダーシップ教育は、1年次の必修科目「みんなのリーダーシップ入門」と、2・3年次の選択科目「リーダーシップ開発」で行う。カリキュラムは、リーダーシップ教育を実施する学校現場を支援する企業の協力を得て、キャリア支援グループの教師が試行錯誤してつくり上げた。

「みんなのリーダーシップ入門」は、リーダーシップの3要素について理解することから始まり、様々な活動を通じて、コミュニケーション力や傾聴力、発信力、情報収集力、他者理解、洞察力などを高め、それらの力を発揮する活動として自校をアピールする商品やサービスを考え、プレゼンテーションを行う（写真1）。

授業は、全8クラスで毎週金曜日に実施。1クラス35人を7グループに分けて行う。チーム・ティーチングが基本で、T1は授業の進行を、T2は生徒支援を担当。また、T2は原則としてクラス担任が務め、学習評価のための見取りも行う。

指導案には、授業の目標、活動の内容とタイムスケジュール、生徒への声かけのポイント、グループ分けの留意点などが詳細に示されている。例えば、グループワークの留意点としては、「一人ひとりの発言の後に、拍手を送るよう助言する」ことが、振り返り時の声かけの留意点としては、「リーダーシップが発揮できたかどうかを考えながら書くよう助言する」ことなどが記載されている（写真2）。生徒が学習意欲を高め、自己肯定感が持てるように、メタ認知を促す声かけについて具体的に記載し、クラスによって指導に差が出ないように配慮しているのだ。

毎週水曜日の朝、授業担当者16人が集まり、指導案を基に生徒に伝える内容や留意点などについて共有する打ち合わせを行う。その中で、改善点が見つかった場合は、指導案を修正し、再配布することもある。



写真1 自校をアピールする商品やサービスを考え、プレゼンテーションを行う活動では、まずはアピールする材料を探すために、自校のよさを付箋に書いて出し合った。



写真2 授業の最後に行う振り返りでは、担当教師が、指導案に沿って振り返りのポイントなどを伝えた。

2 授業の振り返り

授業の振り返りを共有する場を設け、多面的に自分の行動を捉える

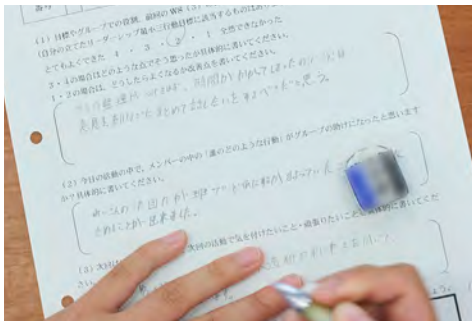


写真3 1コマを90分間とする同校では、振り返りの時間を十分確保し、生徒が自身の学びをメタ認知できるようにしている。

授業で大切にしているのは、同校が育成を目指すリーダーシップについて、生徒と教師がともに正しく理解することだと、2019年度から2年連続で1年次を受け持った内藤翔太先生は語る。

「生徒は、一般的なリーダー像が頭にあり、どうしても率先垂範だけをリーダーシップと捉えがちです。そこで、授業では、各グループを回りながら、目標共有や相互支援をしっかりと行っている生徒を見つけ、みんなの前で褒めることで、そうした行動もリーダーシップであることに気づかせるようにしています。今年度受け持っているクラスは、活発に活動し、クラスのまとまりもよくなりました。その要因の1つは、リーダーシップに対する私自身の理解が深まり、生徒に適切な声かけができるようになったことにあるのではないかと感じています」

毎授業の最後には、ワークシート(図)に沿って、生徒がその日の授業における自身のリーダーシップについて振り返る時間を設けている(写真3)。キャリア支援グループの龍前唯似先生は、振り返りの大切さを次のように指摘する。

「ワークシートの項目は、自分の成長を客観的に捉えることや、授業での学びを他の場面で生かそうと意識させることなどに留意して設定しました。そして、授業の冒頭では、前時に日常生活で生かせることと書いたことを実践したかどうかを尋ねています。単元の最初の頃は、自分が前時の振り返りとして書いた内容を思い出せない生徒もいますが、回を重ねるにつれて、『部活動で練習のアイデアを提案した』『ほかの授業のグループワークで問題点を指摘した』といった記述が見られるようになります。教師が粘り強く発信し続け、取り組みを継続することの意義を実感しています」

ワークシートには、グループの自分以外のメンバーが、どの場面で、どのように、目標共有・率先垂範・相互支援のどの要素を発揮したのかを記入する項目も設けて、他者が発揮するリーダーシップにも目を向けられるようにしている。そして、記入した内容をグループ内で共有する場を、2時間ごとに設けている。「Aさんが情報の取りまとめをしてくれたので、話し合いがスムーズにできた」「Bさんの一言で、答えを出すことができた」などと、自分

図 振り返りのワークシート(抜粋)

① リーダーシップ最小3行動(「目標共有」「率先垂範」「相互支援」)の中で、あなたがあまり得意でない(苦手なもの)はどれだと思いますか?
 [相互支援。他の人と意見が合うことが多いので、相手と話し合いが難しいことが多い。]

② 今日の「課題解決ゲーム③」で、あなたは①のどのようなところでリーダーシップを発揮しようとしたか、また、挑戦してみてどんな感想を持ちましたか?
 [みんなが意見を言った内容と関連するように細かく言った。何かの特徴を言葉で伝えるのは不要だと思った。]

③ 「課題解決ゲーム③」について
 (1) グループワークの中で自分自身が工夫したこと、意識して行動・発言したことは何ですか?
 [見本の紙の特徴を書く人にわかりやすく伝えた。細かく伝えるように意見をまとめた。]
 (2) メンバー(あなたも含む)の行動(発言)で、課題達成(アイデアの提案、情報の取りまとめ、問題点の明確化など)に役立ったことは、誰のどのようなことでしたか?
 [みんな積極的に紙を見に行っていて、書くと人にわかりやすく伝えられた。11-1のわかりやすい特徴を細かく言っていた。]

④ 「課題解決ゲーム③」ゲーム2(風景)について

振り返りの項目は、3要素をどの場面でどのように発揮できたか、グループワークで工夫したことや挑戦したことは何か、それまでの活動を基に今回改善した発言や行動は何かといったことだ。さらに、グループの自分以外のメンバーが発揮したリーダーシップについても記入する項目を設けることで、他者のよさに目を向け、互いを認める機会となるようにしている。単元の最初では、書き始めるまでも時間がかかるが、授業の回数を重ねるにつれて、自分の行動だけでなく、グループのメンバーの行動も素早く振り返ることができるようになるという。

※学校資料を抜粋して掲載。

自身のリーダーシップの発揮についてフィードバックをもらい、自己を振り返り、よりよいリーダーシップを発揮するよう具体的な計画を立てる。自分が無自覚に行っていたことが、リーダーシップの発揮になっていたと指摘される生徒も少なくないという。

「自分の行動が、気づかないところで他者の役に立っていたと知ること、自己肯定感が高まるとともに、指摘してくれた仲間を尊重しようとする気持ちも生まれます。相互の振り返りは、フィードバックを受ける側だけでなく、送る側にとっても、他者のリーダーシップを開発することにつながるのです」（小島先生）

3 成果・課題

授業や学校行事が活性化。 「リーダーシップ教育」という 特色ある教育について 中学生への周知が課題

「みんなのリーダーシップ入門」の学習評価は、「知識・理解・表現」「技能」「関心・意欲・態度」の3観点で実施。「知識・理解・表現」は、ワークシートに「前時の振り返り」「本時の振り返り」「次週の目標」がきちんと書いているかを教師が評価する。「技能」は、全体発表や成果物を伴う活動を、教師がルーブリックを用いて評価し、「関心・意欲・態度」は、T2で入るクラス担任が生徒の様子を見取り、同観点で優れていた生徒を最大5人程度記録する。そして、3観点を4：3：3で重みづけをして、評定をつける。小島先生は、評価の方針を次のように説明する。

「リーダーシップが発揮できたかどうかよりも、本校が目指すリーダーシップについて理解しているか、自分の行動を客観的に振り返り、今後どのように生かそうとしているのかを評価します」

リーダーシップ教育の成果は、学校生活の様々な場面で表れている。授業では、生徒がグループワークで積極的に意見を述べ合うようになり、学校行事では、実行委員会が決定した企画について、自分にできることを考え、率先して動く生徒が増えている。

「2年次生のポートフォリオを見ると、学校行事や部活動でリーダーシップを発揮できたという記述が増えています。1年次に学んだ、自分ができるリーダーシップを意識し、実践している生徒がいることを心強く感じています」（小島先生）

キャリア支援グループの佐藤健太郎先生は、生徒の自己肯定感の高まりに手応えを感じている。

「リーダーシップについて学んだ生徒は、気持ちが前向きになっていると感じます。リーダーでなくても、自分の行動がメンバーに認められ、自分にも発揮できるリーダーシップがあると実感することで、自己肯定感を高める生徒が増えていると思います」

今後の課題は、リーダーシップ教育を中学生や保護者に周知することだ。新しい概念である、誰もが発揮するリーダーシップの周知には、難しさを感じている。

「私たちが育成を目指すリーダーシップは、社会において誰もが必要とされる素養であることを丁寧に説明し、その特色ある教育に期待感を持って本校に進学できるよう、本教育に関する情報発信の方法を工夫していきたいと思っています」（小島先生）